View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kanazawa University Repository for Academic Resources

ダウン症をもつ子どもと母親との相互作用に関する台湾と日本の比較研究 : 母親の会話スタイルと子どもの表出言語発達の関連

著者	黄 ?芬, 窪田 庸子, 大井 学
雑誌名	コミュニケーション障害学 = The Japanese journal of communication disorders
巻	23
号	1
ページ	9-15
発行年	2006-04-30
URL	http://hdl.handle.net/2297/19022

コミュニケーション障害学 23，9－15(2006)

■原　著

ダウン症をもつ子どもと母親との相互作用に関する台湾と日本の比較研究：
母親の会話スタイルと子どもの表出言語発達の関連[*1]

黄 愫芬[*2]　窪田庸子[*3]　大井 学[*4]

Comparative Studies of the Mother-Child Interaction in Children with Down Syndrome in Taiwan and Japan: The Relationship between Maternal Conversational Style and Child's Expressive Language Developments[*1]

Su-Fen HUANG[*2]　Yoko KUBOTA[*3]　Manabu OI[*4]

母親の会話スタイルと子どもの表出言語発達との関連について，台湾と日本の比較研究を行った．参加者は台湾と日本の各16組のダウン症をもつ子どもとその母親であった．パス解析の結果，両国で母親の会話スタイルが子どもの2年後の追跡時の表出言語発達に影響を及ぼすメカニズムが大きく異なることが示された．台湾では，母親の指示と指示質問の多さが子どもの言語発達を抑制する方向に働いており，明確化要請は促進因として働いていた．日本では，母親の指示と指示質問が抑制因として働き，確認要請が促進因として働いていた．応答は抑制因として働いていた．母親の指示が子どもの言語発達に否定的影響を及ぼすことを示す結果は，英語圏，台湾，および日本に共通であった．しかし，英語圏で子どもの言語発達に促進因として働いている母親の応答が，台湾では影響力をもたず，日本では否定的な影響を与えていることが明らかになった．

Key Words: children with Down syndrome, maternal conversational style, expressive language developments, comparative studies, path analysis

1．問題と目的

母子会話は，それがダウン症などで言語が遅れている子どもの言語発達にどのように影響するのかという視点から，米英両国で盛んに研究されてきた（Buium, Rynders, Turnure, 1974；Cardoso-Martins, Mervis, 1985；Davis, Oliver, 1980；Fischer, 1987；Jones, 1977；Leifer, Lewis, 1983；Matey, Kretschmer, 1985；Petersen, Sherrod, 1982；Rondal, 1977；Tannock, 1988）．そして，それらの基礎研究の成果をふまえ，ダウン症をもつ子ども（以下，ダウン症児と記す）に対し，母子相互作用を介した言語指導のプログラムが提案されてきた．その一部は台湾と日本にも取り入れられている．例えば，母親からの子どものことば（例："the ball"）に対する意味的に関係のある応答（例："Yes, the ball is rolling."）や，子どものことばの意味を明らかにするよう求める質問（例："the ball? What?"）が文法の習得を助けており，指示（例："Take the ball."）やテスト質問（例："Is this a ball?"）が言語発達に否定的な影響を与えていることが示唆されていることから，母親たちには，指示を減らし，応答を増やすようにという助

*1 本稿の一部は，第40回日本特殊教育学会（2002年9月16日，上越），第42回同学会（2004年9月12日，東京）で発表した．2005年12月17日受理．
*2 国立台東大学幼児教育学科（〒950 台湾 台東市中華路1段684号）．Department of Early Childhood Education, National Taitung University (684, ChungHua Rd., Sec.1, Taitung, Taiwan 950, R.O.C.)
*3 金沢大学大学院社会環境科学研究科．Graduate School of Socioenvironmental Studies, Kanazawa University
*4 金沢大学教育学部．Faculty of Education, Kanazawa University

言が行われている（大井，2001）.

しかし，日本および台湾における基礎研究は，米英に比べて極めて少なく，日本では4つの研究（後藤，1976；後藤，後藤，広瀬，ほか，1976；細川，橋本，池田，1989；松尾，加藤，1984）が，台湾においても3つの研究（陳，1991；王，1990，1993）が行われただけである．しかも，ダウン症児と健常児との比較研究において採用されている方法は，両国とも，生活年齢または精神年齢をマッチさせて行う方法のみであった．ところが，ダウン症児の話しことばは，そのような方法によると，健常児に比べ言語発達の面で明らかな遅滞を示している（Marshall, Hegrenes, Goldstein, 1973）が，MLU（平均発話長）によってマッチさせた方法によると，同じMLUの健常児の話しことばとよく似ている（Rondal, 1977）ことが報告されている．そして，子どもの生活年齢または精神年齢をマッチさせたグループではダウン症児の母親と健常児の母親との言語に差が表れやすく，言語水準やMLUをマッチさせた場合には差がみられないということが，米英の研究では示されている（例えば，Leifer, Lewis, 1983；Petersen, Sherrod, 1982など）．つまり，母親の発話機能は，子どもの言語水準によって変化しているのであって，子どもの障害の有無は関係しないことが示されている．したがって，ダウン症児と健常児の母子相互作用を比較しようとする研究では，両者が同じ言語水準であるか否かを配慮することが必要であると考えられる．

そこで，以上を考慮したうえで筆者らはダウン症児とその母親との相互作用に関する台湾と日本の比較研究を行った（黄，2002；Huang, Oi, 2001a, b）．ところが，その結果は，米英の結果と大きく異なっていた．台湾でも日本でも，ダウン症児は，ことばを話す能力が同レベルにある健常児よりも多く指示され，質問されていた．台湾の母親には「指示」が多く，日本の母親には「質問」および「応答」が多かった．

先に述べたように，米英では，母子会話スタイルのうち母親の指示やテスト質問が，子どもの言語発達に否定的な影響を与えていることが示唆されている．そこで，筆者ら（黄，大井，窪田，2002）は，母親の会話スタイルおよび母親の発話の複雑さの個人差ならびに文化差と子どもの表出言語能力の発達との関連を検討した．その結果，2年後の追跡時における子どもの表出言語能力は，母親の発話の複雑さや子どもの観察時の表出言語能力とは有意な関連を示さず，母親の会話スタイルの指標とした「指示，指示質問，応答，テスト質問，情報質問，明確化要請，確認要請」（**表1**参照）のなかで，「指示，指示質問，応答，明確化要請，確認要請」が有意な関連を示すことが明らかになった．さらに，筆者らの観察によれば，観察時において指示の多かった母親は，追跡時においても指示が多いというように，それぞれの母親の会話スタイルの特徴は2年の年月を経てもほぼ同じであり，大きな変化はない印象を受けた．

そこで，本研究では，それらの要因の関連のしかたについて，それぞれの要因が直接「追跡時の表出言語年齢」に影響するというパスダイアグラム（**図1**）を想定

表1　母親の会話スタイルの指標

カテゴリ	定　義
指示	指示，命令，注意，要請など，相手に特定の行動を求める 例：これを見なさい．玩具を取って．早く食べなさい．
指示的質問	質問文を使って，子どもに行動を要求する 例：どうしてそこに座らないの？
応答	問い，話しかけなどに対する反応 例：子ども「ご飯をたべたい」　母親「どうぞ」
テスト質問	子どもがどう答えるかわかっているのに，質問をする 例：これは車ですか？
情報質問	子どもがどう答えるかわかってないので，質問をする 例：これはおいしいかな？
確認要請	子どもの発話の意味がわからないので，質問をする 例：何？
明確化要請	子どもの発話に対して，より理解するために，子どもの発話の一部を繰り返して質問する 例：あなたは馬と言った？

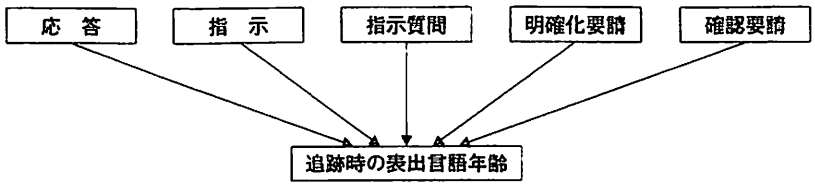


図1 子どもの追跡時の表出言語年齢に影響する要因間の仮説的な関係

し，その妥当性について，パス解析を用いて分析した．

2．方 法

2．1 対象者

本研究では，筆者ら（黄，2002；Huang, Oi, 2001a, b）の母子相互作用研究に参加した台湾および日本のダウン症児それぞれ20組のうち，追跡調査に応じた16組を対象とした．対象児のプロフィールを表2に示す．台湾では，学齢前児童行為発展盗表（Chinese Child Development Inventory：Hsu, Su, Hsiao, et al., 1978）によって，日本では，KIDS乳幼児発達スケール（Kinder Infant Development Scale：三宅，大村，高嶋，ほか，1991）によって表出言語年齢（ELA）の検査を行った．用いた検査法は両国で異なっているが，ダウン症児群どうしの観察時のELAと平均発話長（MLU）については，互いに生活年齢でマッチされている両国の健常児群とのマッチによって，差がないこと（詳しい内容は，黄，2002；Huang, Oi, 2001a, bを参照）が確認されている．また，2年後の追跡時の表出言語年齢についても，両国のダウン症児群の表出言語年齢に差がない（U=106.5；p>.10）ことが確認されている．母親の教育歴や年齢，社会経済的レベルについてのデータは今回はない．

2．2 手続き

自宅において母子の自由遊び場面約30分をビデオ記録し，その2年後の追跡時に，日本では，アイバーグ・チェックリスト（EBCL）日本語翻訳版とKIDS乳幼児発達スケールを，台湾では，台湾語に訳したEBCLと学齢前児童行為発展盗表を各家庭に郵送して記入を依頼した．調査は，台湾では2001年12月10日から2002年2月5日の間に，日本では2002年5月28日から2002年7月10日の間に実施した．観察時にも，台湾は日本より半年早い時期に調査を実施した．

2．3 分析

遊びの開始から10分間の母子会話について得られた観察時の各母親の会話スタイル指標の値と，追跡時の子どもの表出言語年齢を算出し，それらのデータを図1に示したモデルにあてはめてパス解析を行った．パス解析とは 変数どうしの因果関係を推定し，モデル（構造方程式とパス図）を作り，変数間のパス係数を求めてモデルを完成させるものである．なお，パス係数の大きさの判断基準については，相関係数に関する一般的な目安（山際，田中，1997）を参考にした．つまり，絶対値が0.3以下はほとんど関係がないものとみなし，0.3より大きく0.4以下は「小さい」，0.4より大きく0.7以下は「中程度」，0.7より大きい場合は「大きい」関係を示すとみなし解析を行った．母親の会話スタイル指標の算出法は，以下のとおりである．ビデオ記録と文字転写記録をもとに母親の全発話を表1に示す機能カテゴリに沿って分類し，各カテゴリの発話数が全発話数に占める割合を算出した．発話は次のように定義した．1つの文が1つの発話とする（例：「遊びたい?」）．複数の文でも接続詞を使って1つの文になっている場合は1つの発話とする（例：「ご飯を食べるからおもちゃ片付けて」）．また，話しているときにポーズがあればそこで1つの発話とする．従って，次の例は2つの発話とす

表2 対象児のプロフィール

	台湾のダウン症児（16人）		日本のダウン症児（16人）	
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差
観察時の生活年齢（月齢）	56.75	12.80	59.44	14.78
観察時のMLU	1.80	0.50	1.30	0.27
観察時の表出言語年齢（月齢）	20.56	6.47	25.06	5.65
追跡時の表出言語年齢（月齢）	33.75	8.76	39.13	12.24

表3 母親の会話スタイルの出現率（$N=16$）

	台湾		日本	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
指示	0.31	0.05	0.24	0.09
指示質問	0.02	0.02	0.01	0.01
明確化要請	0.00	0.00	0.02	0.01
確認要請	0.00	0.00	0.02	0.02
応答	0.04	0.02	0.13	0.07

る（例：「あっ，」ポーズ「これを使って」）．母親の全発話のカテゴリを複数の評定者間で協議して決定した．評定の一致率は台湾では87%から95%，日本では93%から95%であった．（詳しい内容は，黄，2002；Huang, Oi, 2001a, b を参照のこと）．

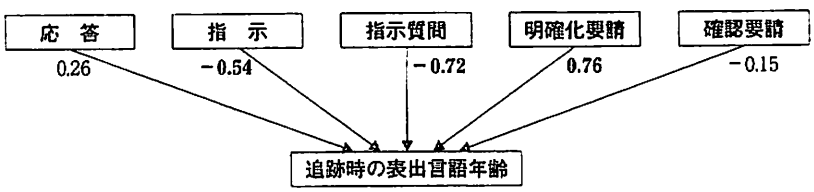
3．結　果

3．1 台湾の母親の会話スタイルと子どもの追跡時の表出言語年齢

台湾の母親の会話スタイルの各指標の値と追跡時の子どもの表出言語年齢を**表3**に示す．**図1**に示された仮説に基づき，パス解析を行ったところ，**図2**に示した結果が得られた．台湾の母親の「指示」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，－0.54と中程度の負の係数が認められた．台湾では母親の指示の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は低くなる．次に，台湾の母親の「指示質問」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，－0.72と大きい負の係数が認められた．台湾では母親の指示質問の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は低くなる．他方，台湾の母親の「明確化要請」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，0.76と大きい正の係数が認められた．台湾では母親の明確化要請の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は高くなる．

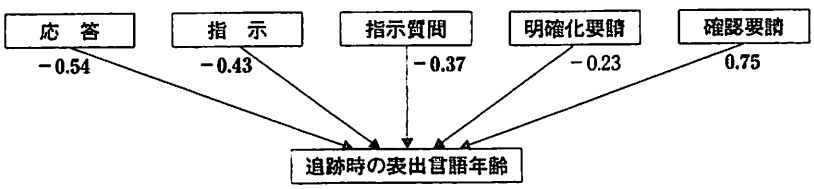
3．2 日本の母親の会話スタイルと子どもの追跡時の表出言語年齢

日本の母親の会話スタイルの各指標の値と追跡時の子どもの表出言語年齢を**表3**に示す．**図1**に示された仮説に基づき，パス解析を行ったところ**図3**に示した結果が得られた．日本の母親の「指示」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，－0.43と中程度の負の係数が認められた．日本では母親の指示の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は低くなる．次に，日本の母親の「確認要請」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，0.75と大きい正の係数が認められた．日本では母親の確認要請の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は高くなる．また，日本の母親の「応答」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，－0.54と中程度の負の係数が認められた．日本では母親の応答の割合が高いほど子どもの追跡時の表出言語年齢は低くなる．最後に日本の母親の「指示質問」から子どもの「追跡時の表出言語年齢」へのパスは，－0.37と小さい負の係数が認められた．日本では母親の指示質問の割合が高いほど子どもの追跡



太字は0.3以上のパス係数を示す

図2 台湾の母親の会話スタイルと子どもの追跡時の表出言語年齢のパスダイアグラム



太字は0.3以上のパス係数を示す

図3 日本の母親の会話スタイルと子どもの追跡時の表出言語年齢のパスダイアグラム

時の表出言語年齢は低くなる．

4．考　察

4．1　台湾と日本の母親の会話スタイルと子どもの追跡時の表出言語年齢

本研究で取り上げた事例では，台湾では母親の指示と指示質問の多さが子どもの言語発達を抑制する方向に働いていた．一方，子どものことばの意味をたずねる「明確化要請」が多いことは促進的に働いていた．また，応答と確認要請は効果がきわめて小さかった．したがって，台湾のダウン症児とその母親の相互作用について，子どもの言語発達を促すためには指示性のもつ意味を再検討することが望ましいかもしれない．具体的には，指示と指示質問を控えめにすることや，子どものあいまいな伝達に耐えて明確化の労をとることを検討することが必要であろうと考えられる．

日本の事例の場合でも，台湾の事例の場合と同様に母親の指示と指示質問は言語発達を抑制する方向に働いていた．一方，日本の事例では，母親が子どものことばの意味を確かめる「確認要請」が促進的に作用していた．しかし，最も意外な結果であったのは，母親の応答が多いことが日本の事例では抑制的に働いていることであった．これは，米英では母親の応答が言語発達を促す方向に働いているのとは全く異なった結果であった．したがって，日本のダウン症児とその母親の相互作用について，子どもの言語発達を促すためには応答性のもつ意味を再検討することが望ましいかもしれない．具体的には，指示と指示質問を控えめにすることや確認要請をすることに加えて，応答性を減らすこと，すなわち，子どものちょっとしたしぐさにすぐ親切に反応するのではなく，子どもが自分のことばで表現するまで「待つ」ことを検討することが必要であろうと考えられる．

4．2　台湾と日本と米英の共通点と相違点の臨床的妥当性について

さて，母親の指示が子どもの言語発達に否定的な影響を与えるという結果は，米英も台湾も日本も共通であった．また，母親の明確化要請や確認要請が言語発達を促すという結果は台湾も日本も共通であり，米英での母子会話と子どもの言語発達に関する研究結果（Yoder, 1989）とも一致する．しかし，3つの文化圏で大きく異なっているのは，応答が，台湾では子どもの言語発達に影響力をもたず，日本では否定的な影響を与えている点であった．これは，米英では促進的な働きをしている（Mahoney, 1988）という結果とは一致していない．

この点に関しては，それぞれの文化の相違が影響を及ぼしている可能性がある．観察から得られた印象では，台湾の母親の指示性は，子どもをそれに抗するために一方で乱暴にもするが，他方では彼らの積極的なコミュニケーション態度の源ともなっているようにみえる．すなわち，話すことを迫られる子どもは，はっきりと，断定的に，力強く話す習慣を身につける可能性がある．また，子どもの行動をコントロールしようとする傾向は，子どもを一方で親に服従する態度に導くことにもなるが，他方では，逆に，親に対抗して話したり行動したりする自立的な態度を養うことに導く可能性もある．一方，日本の母親は，子どもがきちんとことばに表現しなくても，その非言語行動から考えを推測し代弁してくれるようにみえる．このような日本の母親の応答性は，子どもに対しては，伝達の失敗を防ぐ一方で，表現能力の成長を妨げるおそれも併せもつと考えられる．子どもは，相手からは自分の考えに沿ったことばを聞かされることが多いために，反発することなく相手の話に耳を傾ける態度が養われることになるが，しかし一方では，相手からたずねてもらわないと自分から話し出せなくなる受動的な態度につながるおそれがあると考えられる．このような，それぞれの文化の相違が，母親の同じ発話機能であっても，その作用のしかたに影響を及ぼし，本論文の結果に現れたような子どもの言語発達に及ぼす効果の相違を生み出した可能性に関しては，今後の検討にゆだねたい．

4．3　本研究の臨床的意義

本研究では，母子会話スタイルが言語発達に及ぼす影響は，米英，台湾，日本で共通する面をもつが，応答の果たす役割になると三者三様であることが明らかになった．もし，このような結果が偶然のものでないとすると，米英の研究結果に基づいてつくられている母子の言語指導プログラムを台湾と日本で適用することには慎重でなければならないということになる．特に子どもの伝達や行動に応答していくようにと母親に助言することは，応答しすぎることが思わしくない結果を招いていることが示唆されている日本では再考の余地があるのではないかと考えられる．台湾と日本の母親の子どもへの応答の内容やその役割等についてのより詳しい検討が今後の課題である．また，今回の追跡調査では，母親の教育歴や社会経済的レベル，年齢などを確認しておらず，観察時と追跡時の母親の会話スタイルに変化がないかどうかについてもきちんとしたデータによる確認がなされていない．これらは，今後の研究時

に注意するべき点である．

文　献

Buium, N., Rynders, J., Turnure, J. Early maternal linguistic environment of normal and Down's syndrome language-learning children. *Am. J. Ment. Defic.* 79 (1), 52-58 (1974).

Cardoso-Martins, C., Mervis, C. B. Maternal speech to prelinguistic children with Down's syndrome. *Am. J. Ment. Defic.* 89, 451-458 (1985).

陳美琇．智能不足與正常児童組母子互動中母親口語及児童反應行為之研究．国立台湾師範大學特殊教育研究所碩士學位論文．101-111 (1991).

Davis, H. Oliver, B. A comparison of aspects of the maternal speech environment of retarded and non-retarded children. *Child Care Health Dev.* 6, 135-145 (1980).

Fischer, M. A. Mother-child interaction in preverbal children with Down syndrome. *J. Speech Hear. Disord.* 52, 179-190 (1987).

後藤守．母子言語関係の成立過程に関する研究（Ⅰ）ーダウン症候群の幼児と母親の言語関係の分析を中心としてー．北海道教育大学紀要．C，26 (2)，9-21 (1976).

後藤守，後藤恵美子，広瀬香，木村由里．母子言語関係の成立過程に関する研究（Ⅱ）ーダウン症候群の幼児と母親の言語関係に関するカテゴリー分析ー．北海道教育大学紀要．C，27 (1)，13-21 (1976).

細川かおり，橋本創一，池田由紀江．精神遅滞幼児の母子遊び場面における相互交渉の分析．心身障害学研究．14 (1)，53-60 (1989).

Hsu, C., Su, H., Hsiao, S., Lin, C., Sung, W., Chang, C. Chinese child development inventory. *Acta Paediatrica Sinica.* 19, 142-156 (1978).

黄愫芬．台湾の母親のダウン症児に対するコミュニケーション・スタイルー自由遊び場面と食事場面の比較を通してー．日本特殊教育学会．40 (3)，283-291 (2002).

Huang, S., Oi, M. Maternal question-asking behavior to Taiwanese children with Down syndrome and with no disability. *Psychol. Rep.* 88, 501-504 (2001a).

Huang, S., Oi, M. Maternal question-asking of Japanese children with Down syndrome and with no disability. *Psychol. Rep.* 88, 1096-1098 (2001b).

黄愫芬，大井学，窪田庸子．ダウン症をもつ子どもと母親との相互作用：台湾と日本の比較（1）母子コミュニケーションと行動問題の関連．日本特殊教育学会第40回大会発表論文集．521 (2002).

Jones, O. H. M. "Mother-child communication with prelinguistic Down's syndrome and normal infants". *Studies in Mother-Infant Interaction.* Schaffer, H. R. (ed). New York, Academic Press, 1977, p.379-401.

Leifer, J., Lewis, M. "Maternal speech to normal and handicapped children: a look at question-asking behavior". *Infant Behav. Dev.* 6, 175-187 (1983).

Mahoney, G. "Enhancing the developmental competence of handicapped infants". *Parent-child interaction and developmental disabilities.* K. Marfo (ed.) Praeger, 1988.

Marshall, N., Hegrenes, J., Goldstein, S. Verbal interactions: Mothes and their retarded children versus mothers and their nonretarded children. *Am. J. of Ment. Defic.* 77, 415-419 (1973).

Matey, C., Kretschmer, R. A comparison of mother speech to Down's syndrome, hearing-impaired, and normal-hearing children. *The Volta Review.* 87, 205-213 (1985).

松尾久枝，加藤孝正．母子交渉場面における母親の応答性ー前言語期の重度・中度精神遅滞児と健常児の場合ー．聴覚言語障害．13, 173-186 (1984).

三宅和夫，大村政男，高嶋正士，山内茂，橋本泰子．KIDS乳幼児発達スケール．発達科学研究教育センター．1991.

大井学．"語用論的アプローチ"．ことばの障害の評価と指導．大石敬子（編）．東京，大修館書店，2001，p.86-107.

Petersen, G. A., Sherrod, K. B. Relationship of maternal language to development and language delay of children. *Am. J. Ment. Defic.* 86 (4), 391-398 (1982).

Rondal, J. Maternal speech in normal and Down's syndrome children. *Research into practice in mental retardation. Vol. 2, Education and Training* (ed.) P. Mittler, Baltimore, University Park Press, 1977, p.239-44.

Tannock, R. Mother's directiveness in their interactions with their children with and without Down syndrome. *Am. J. Ment. Ret.* 93 (2), 154-

165 (1988).
王天苗. 智障幼児與母親自由遊戯情境互動行為之研究. 特殊教育研究學刊. 6, 131-150 (1990).
王天苗. 智能不足児童與母親互動行為之追蹤研究. 特殊教育研究學刊. 8, 147-174 (1993).
山際勇一郎, 田中敏. ユーザーのための心理データの多変量解析法. 東京, 教育出版, 1997.
Yoder, P. Maternal question use predicts later language development in specific-language-disordered children. *J. Speech Hear. Disord.* 54, 347-355 (1989).

《ABSTRACT》

Comparative Studies of the Mother-Child Interaction in Children with Down Syndrome in Taiwan and Japan: The Relationship between Maternal Conversational Style and Child's Expressive Language Developments

Su-Fen HUANG[*1] Yoko KUBOTA[*2] Manabu OI[*3]

[*1] Department of Early Childhood Education, National Taitung University
(684, ChungHua Rd., Sec.1, Taitung, Taiwan 950, R.O.C.)
[*2] Graduate School of Socioenvironmental Studies, Kanazawa University
[*3] Faculty of Education, Kanazawa University

The relationship between maternal conversational style and child's expressive language developments in Taiwan and Japan was analyzed in the present study and results compared with those from English-speaking countries. Participants were 16 Taiwanese and 16 Japanese children with Down syndrome and their mothers. Path analysis indicated that how the maternal conversation style in free play effected a child's development of language expression after two years was slightly different in Taiwan and Japan. In Taiwan, a larger number of directives and directive questions from the mother worked toward suppressing the child's language development, while a larger number of confirmation requests, asking the meaning of the child's words, worked toward promoting the child's language development. In Japan, the same pattern occurred and in addition, responses acted as suppressors. Results indicating that the mother's directions had a negative effect on the child's language development were common to English-speaking countries, Taiwan, and Japan. However one significant difference could be seen in that responses which acted as promoters in English-speaking countries had no effect in Taiwan, and had a negative effect in Japan.